

第IV部門

都市娯楽活動へのアクセシビリティが主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究

京都大学工学部地球工学科 学生員 ○弓場 雅斗

京都大学大学院工学研究科 正会員 川端 祐一郎

京都大学大学院工学研究科 正会員 藤井 聡

1. 研究背景と目的

余暇活動は人々の生活にゆとりや豊かさをもたらす不可欠な要素として定着しつつあり、余暇活動の充実方法やそれが幸福感に与える影響について検証することは、生活全体の主観的幸福増進に資すると考えられるが、既往研究において実証的知見の蓄積は乏しい。また、都市娯楽活動には多くの場合、活動場所への移動が必要であるが、交通手段の利便性が都市娯楽活動を通じた幸福感に与える影響は殆ど明らかにされていない。本研究は、芸術やスポーツに関連した都市娯楽活動へのアクセスの容易さ、娯楽活動の頻度、そして主観的幸福感の相互の関係について、web アンケートデータの分析を通じて定量的に検証することを目的とする。

2. 研究手法

本研究では東京 23 区在住者 500 名、政令指定都市在住者 500 名（「20 代」「60 代」の各年代別及び男女別人数は均等に配分）に対し Web アンケートを行った。調査項目としては、まず既往研究の測定尺度¹⁾²⁾に倣い、主観的幸福感を「感情的幸福感」「認知的幸福感」に区別して尋ねた。次に、余暇活動に関する質問であるが、まず「コンサート等を聴きに行く」「ミュージカル・舞台・落語等を観に行く」という 2 つの活動について、すべての参加者に回答を求める。またこれに加え、「映画を観に行く」、「スポーツをしに行く」、「スポーツを観戦しに行く」、「遊園地・テーマパークに行く」、「美術館に行く」、「動物園・水族館・博物館等に行く」の中から参加者が最もよく行うものを選択した上で、その活動について回答することを求めた。各活動について、頻度・活動仲間・開始時刻・交通手段等を聞いている。交通手段の利便性指標としては移動費や移動時間といった客観的指標だけでなく、Lättman ら³⁾が提案する主観的アクセシビリティ尺度を用いた。また、主観的幸福に影響し得る個人属性として、世帯収入や結婚の有無、子供人数を尋ねた。

表 1：主観的アクセシビリティ指標

次の項目にどのくらい当てはまりますか？

(0:いいえ～3:どちらでもない～6:はいの7件法で回答を依頼)

- ・行き/帰りの移動は、不都合なく、「スムーズ」(円滑)にできますか？
 - ・行き/帰りの移動で使う「交通手段」が便利だからこそ、その活動ができると思いますか？
 - ・行き/帰りの移動で使う「交通手段」に満足していますか？
-

Masato YUBA, Yuichiro KAWABATA, Satoshi FUJII

yuba.m@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

3. 分析結果

「東京 23 区」と「政令指定都市」在住者で分けて分析を行った。ここでは東京在住者の結果を示す。まず、従属変数を主観的幸福感とし、説明変数については各余暇活動の頻度や主観的アクセシビリティ及びそれらの交互作用項をステップワイズ法により変数選択を行い、重回帰分析を行った。結果は表 2、表 3 に示す通り、コンサート会場への主観的アクセシビリティが高くかつその頻度が高い場合に主観的幸福感が有意に増すことが示唆された。

表 2：従属変数：感情的幸福感（東京のみ）

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	t値	p値
(定数)	-2.44	0.99		-2.47	0.01 *
コンサート主観ACC	0.44	0.18	0.16	2.36	0.02 *
結婚ダミー	1.30	0.52	0.17	2.52	0.01 *
学生ダミー	2.27	1.26	0.12	1.80	0.07 †
R ² =0.071, 調整済みR ² =0.057, N=205					
**: p<.01, *p<.05, †p<.10					

表 3：従属変数：認知的幸福感（東京のみ）

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	t値	p値
(定数)	15.02	0.87		17.26	0.00 **
世帯収入	0.00	0.00	0.17	2.43	0.02 *
結婚ダミー	2.63	0.99	0.19	2.67	0.01 **
学生ダミー	5.48	2.26	0.16	2.42	0.02 *
コンサート主観ACC×頻度	0.01	0.01	0.12	1.83	0.07 †
R ² =0.11, 調整済みR ² =0.094, N=202					
**: p<.01, *p<.05, †p<.10					

次に、従属変数を余暇活動頻度とし、説明変数は主観的アクセシビリティや個人属性等からステップワイズ法により変数選択を行い、重回帰分析を行った。ここでも東京在住者の結果を示す。その結果、表 4、表 5 に示す通り主観的アクセシビリティが高いことが余暇活動頻度有意に高めることが示唆された。

表 4：従属変数：コンサート鑑賞頻度（東京のみ）

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	t値	p値
(定数)	1.18	0.81		1.47	0.14
コンサート主観ACC	0.75	0.19	0.20	3.99	0.00 **
主婦ダミー	-3.19	1.45	-0.11	-2.20	0.03 *
R ² =0.047, 調整済みR ² =0.042, N=396					
**: p<.01, *p<.05, †p<.10					

表 5：従属変数：最頻余暇活動頻度（東京のみ）

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	t値	p値
(定数)	-8.20	6.04		-1.36	0.18
最頻余暇主観ACC	3.33	1.04	0.16	3.21	0.00 **
世帯収入	0.01	0.00	0.13	2.48	0.01 *
無職ダミー	16.96	7.96	0.11	2.13	0.03 *
R ² =0.039, 調整済みR ² =0.034, N=395					
**: p<.01, *p<.05, †p<.10					

4. 結論

本研究では、余暇活動の頻度、主観的アクセシビリティ、主観的幸福感の関係の検証を行った。その結果、主観的アクセシビリティや活動頻度の高さが人々の主観的幸福感を高め得ることが一部の余暇活動で示唆された。また、主観的アクセシビリティが高いほど余暇活動の頻度が多くなることも示唆された。今後の課題として、活動頻度が幸福感に与える影響は一部の娯楽のみでしかも交互作用に限って有意であったが、幸福感を説明する統制統制変数を工夫するなど改善の余地があると考えられる。また、移動費や移動時間といった客観的指標と行きやすさや交通手段の満足度といった主観的指標の関係について、より詳細な分析が必要だと考えられる。

- 1) 北川夏樹, 鈴木春菜, 中井周作, 藤井聡: 日常的な移動が主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究・論文集, 67(5), pp. 697-703, 2011
- 2) 大石繁宏: 幸せを科学するー心理学からわかったこと, 新曜社, 2009
- 3) Lättman, K., Olsson, L. E., Friman, M.: Development and test of the Perceived Accessibility Scale(PAC) in public transport, Journal of Transport Geography, 54, pp. 257-263, 2016